大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第三十三卷　第二號

昭和六年八月一日發行

論叢

經濟的變動の分析……文學博士　高田保馬
ディルタイ哲學と經濟哲學……經濟學博士　石川興二

時論

特別會計の整理……法學博士　神戸正雄
所得稅の稅率の改正……經濟學博士　汐見三郎

研究

農家における米の販賣……經濟學士　谷口吉彦
統計利用の意義と問題……經濟學士　蜷川虎三
東海道濱松宿に關する一考察……經濟學士　大山敷太郎

說苑

明治初年御用金の負擔者について……經濟學博士　本庄榮治郎
産米の管外移出高の季節的變動……經濟學士　八木芳之助
金問題批判……經濟學士　松岡孝兒
アンドレアデス氏「日本の人口」について……經濟學士　宮本又次

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁轉載）

第三十三卷　一八〇　第二號　二四

ディルタイ哲學と經濟哲學（二・完）

―「ディルタイの精神科學の哲學の體系と其經濟哲學的意義」―

石川興二

(一)ディルタイに於ける哲學の概念と經濟哲學の概念――一、哲學の概念――二、經濟哲學の概念(以上前卷第四號掲載)
(二)ディルタイの精神科學の哲學の體系と其經濟哲學的意義――一、ディルタイ精神科學の哲學の概念と究極目的――二、其出發點と課題の規定――三、其根本的立場――四、其構造(以上本號掲載)

一、ディルタイの精神科學の哲學の概念と究極目的

ディルタイの哲學的業績の中心をなすところのものは精神科學の哲學（Philosophie der Geisteswissenshaften）である。彼が經濟哲學に對して有する最も重要なる意義も茲に存するのである。既にディルタイに於ける哲學一般の概念を明にし之に基いて經濟哲學の概念を考察せし私は、進んで此哲學一般の概念に基いて彼の精神科學の體系を明にし其經濟哲學に對する意義を考察し以て此哲學の立場に於ける經濟哲學の諸問題の考察の地盤を準備したいと思ふのである。

私は曩にディルタイに於ては哲學なるものは思惟の徹底であり其最も一般的なる機能は所與的

なるものをその最後の基礎にまで溯つて、聯關付け、根據付けんとすることであると述べた。かくて精神科學の哲學なるものは、諸文化域に於て成立し諸文化域を對象とするところの精神諸科學を其最後の基礎にまで溯つて根據付け聯關付けるものである。此精神科學の哲學は二部に分たれる。第一部は精神諸科學を根據付け (Begründen)、聯關付ける (Zusammenfassen) 爲の基礎 (Grund) を置く (legen) ところのものであつて、これ卽ち Grundlegung der Geisteswissenschaften『精神諸科學の基礎付』であり、第二部はかくして置かれたる基礎に基き精神諸科學の聯關を打立てるところのものである。彼はこれを die Philosopie der Geisteswissenschaften in ihrem zweiten Teil「精神科學哲學第二部」であるとなし Encyclopädie der Geisteswissenschaften と呼んでゐる。[1] 而して彼の精神科學の哲學の仕事の中心をなすものは前者卽ち Grundlegung der Geisteswissenschaften であり以下の叙述の中心をなすものもこれである。

此ディルタイの哲學を理解せんが爲には、先づ彼が歷史家であつたことを注意せねばならない。卽ち秀れたる歷史家としての人間的歷史的社會的實在の體驗は常に其哲學的思索の地盤を成し其哲學を大成したのである。而して此兩面の研究を貫くところのものは「歷史的實在に益々深く突き入り云はば其心を聽きとらんとする」[2] 要求であり、更に此歷史的社會的實在の把握に基いて此實在を支配せんとする要求であつたのである。

1) Diltheys gesammelte Schriften Bd. I. S. 422. 及び Bd. VIII S. 7. 參照
2) Bd. V. S. 4.

二、其出發點と課題の規定

精神科學の哲學は精神科學を基礎付けるのである。故にそれは先づ所與としての精神科學の事實を重んじなければならない。而してディルタイは至當にも此事實を重んじて彼の哲學の出發點として居るのである。

彼は既に一八七五年に『人間、社會、及び國家の諸科學の歷史の研究に就て』と云ふ論文に於て經濟、法律、國家、倫理の學問の歷史に就て論じて居るのであるが、その中に於て「哲學者は歷史的遺物の原資料自身に於て歷史家の働きを爲さねばならない。哲學者は同時に歷史家でなければならぬ」[1]となし、また科學論が「諸科學の歷史と互に結ばるものである」ことを述べて居るのである。これを經濟哲學に就て云ふならば經濟哲學の研究は經濟學史の研究と離る可からざる關係に立つこととなるのである。

彼は『精神科學序說』[2]の中に於ては自然科學的意識に立つて精神科學の事實を歪めんとする者を屢々非難しこれに對して自已の態度を主張して居る。例へば彼は次の如くに述べて居る。「人類に於て歷史的に發展し來つた而して一般の用語に從つて人間、歷史、社會の科學なる名稱が與へらるるところの此精神的事實は、我々がそれを支配することではなく先づ第一に把握せんことを

1) V. S. 36.
2) 全集第一卷 „Einleitung in die Geistesvirssenschaften." 1883.

慾するところの實在を形成する。經驗的方法は、此科學の存立自身に於て思惟が茲に其課題解決の爲めに用ふるところの個々の取扱ひ方（Verfahrungsweise）の價値が歷史的批判的（historisch-kritisch）に展開させられることを、又それの主語が人類自身であるところの此大なる事象の直觀に於て、此域に於ける知識並に認識の性質が解明されることを要求する。斯くの如き方法は所謂實證主義者によつて近時屢々用ひらるる仕方に對立するところのものである。此仕方は多く自然科學的研究に於て生長せし知識の概念規定より科學なる概念の內容を引き出し、此概念より如何なる知的仕事に科學の名と地位とが歸せらるべきかを決定するものである」[1]と述べて居る。卽ちこれ等の人々は自然科學に於ては理論學のみが正當なる學とさるる事實を、精神科學にも强い以て精神科學に於ても理論學のみが學であるとなし精神科學の與へられた事實を歪めんとするのである。而してこのことは經濟學に就ても著しく見らるるところである。卽ち經濟學の研究に於ては、スミスに就ては我々はかくの如き狹隘なる立場を見ないのであるが、既にリカルドウ及其後に於ては久しくかくの如き自然科學的意識に支配され來つたのであつて、今日も尙ほ多くの經濟學者はかくの如き意識より脫し切らないのである。[2]

このディルタイの態度は今日まで經濟哲學を最も多く支配したところの新カント派の人々殊にリッケルトにも對立する批判ともなる。卽ちリッケルトの科學論にあつては「普遍的概念を探究

1) I. S. 3.
2) 拙著「精神科學的經濟學の基礎問題」第一二頁以下參照.

する自然科學と歷史的文化科學とを對立せしめ」經濟原論の如き普遍的理論を研究するものを兩者の中間領域に屬するものであるとするのである。卽ちこのものにあつては前述せし實證主義者とは反對に精神科學の固有なるものは唯り歷史學となるのである。而して兩者の何れに於ても實踐的研究は科學とならぬこととなるのである。

然るにディルタイの立場に於こは、斯くの如く「精神諸科學を新に建設せんとする大膽なる建築者が慾するが如くではなく」「精神科學が生長して居るがままに把握し而して根據付け」んとするのである。而して「あるがままの而して働いて居るがままの精神諸科學は、その中に云ひ表はしの三つの異なる部門を結びつけて居るのである」。卽ち「把握に於ける歷史的方向と、抽象的理論的方向と、實踐的方向とは共通的な根本關係として精神諸科學に行き渡つてゐる」と述べて居る。[1] かくてディルタイに於ては此三方向が基礎付けられねばならぬのである。

卽ちディルタイは精神科學の哲學の課題を、彼が知識の理論の課題を初めて其普遍性に於て把握したと考へたるカントより發して明確にしてゐるのであるが、而もかく精神科學の事實を重んずるディルタイは同じくカントより發せし新カント派の人々の如き一面觀に陷らなかつたのである。卽ちカントは知識の理論の一般的課題を「如何にして先驗的綜合判斷は可能なりや」(Wie sind synthetische Urteil apriori möglich?) として把握した。而してカントは數學並に自然科學に就て

1) I. S. 26—7.

此可能性を研究し以てこれ等の學の基礎を置いたのである。

ディルタイは精神科學に於ても「斯くの如き對象的且客觀的認識の可能性の研究が精神諸科學の基礎を成すのである」と考へた。然るに「個々の精神科學は、既に述べたるが如く、事實に關する知識（これを經濟學に就て云へば經濟史の知識）妥當的普遍的眞理に關する知識（經濟學にては經濟原論の知識）と、價値、目的、規範に關する知識（經濟學にては經濟政策論又は實踐論の知識）より成る」[1]のである。斯くて「精神科學の基礎付は知識の總ての部類に關係しなければならない」「先づ對象的把握の域に於ける知識が是認されねばならない」[2]「然しまた諸價値の知識がかかる基礎を要する」[3]「最後に目的定立及び規範附點の域に對してもかかる哲學的基礎は他の二つの域に於けると同樣に必要である。」[4]斯くて「精神科學基礎付」の課題は次の三の課題になることとなるのである。實在の知識（Wissen von Wirklichkeiten）は可能なりや。價値の知識（Wissen von Werten）は可能なりや。目的並に規範の知識（Wissen von Zwecken und Regeln）は可能なりや。が卽ちこれである。而してディルタイは總て知識の理論が實在認識の域に偏す可からざることを屢々注意して居る。卽ち「論理學而して更に進んで知識の理論の全體は實在認識に主として關係することから引きはなされねばならない。而して論理學的學問論的諸命題はそれが等しく實在認識、價値規定、目的定立規範附與に關係する樣に形成されねばならぬ」と述べ、またプラトン[5]並にカント[6]に就きその哲學

1) VII. S. 5（括弧内は筆者の挿入せしところなり）
2) 3) 4) VII. S. 6.
5) V. S 348.
6) Ebenda. S. 358.

的思索が實在認識の域に止まらず總の知識の種類に及んで居ることを賞賛して居る。同樣の注意は經濟哲學に就てもなされねばならない。卽ち經濟哲學は經濟原論及び經濟史に於ける存在の知識を基礎付けるのみにては足らないのであつて、更に正しき哲學的方法によりて價値の知識及び目的並に規範の知識卽ち經濟政策又は實踐論の知識の基礎付を求めねばならぬのである。かくて所與的な經濟學の總てが初めて哲學的に基礎付け得らることとなるのである。

かくの如く精神科學の事實を重んずるディルタイの精神科學の哲學の研究は「先づ精神の特殊諸科學の概觀から出發して居る、何となれば精神の諸科學に於て此全體の仕事の廣汎な材料と動機が存するが故である。而してそれは精神の諸科學より後方へ推論するのである。」[1] 卽ち彼はこのことを彼の精神科學の哲學の入口であるところの『精神科學序說』の『第一入門編—精神の諸科學の聯關に關する瞥見、それに於て一つの基礎付の學の必要が示めさる』に於て爲したのである。

三、其根本的立場

精神科學の哲學はかく精神科學の事實より發しそれに聯關付と根據付とを與ふるところの基礎を求むるのであるが、思惟の徹底としての哲學はこれを最後の確實なる點にまで溯つて求めねばならぬ。かくてディルタイは彼の哲學の最後の基礎を求むる課題を次の如くに提出して居る。「特

1) I. Vorlde S. XIX.
2) Ebenda. S. XVII.

殊諸科學に結合と確實とを與ふる諸命題の一聯關の爲めの確乎たる支持點は何處にありや」。[2]

ディルタイはこの哲學の根本的立場について「私の哲學の根本思想は今日まで未だ嘗て全體的な完全な歪められない經驗が哲學することの基礎に置かれなかつた從つて未だ嘗て全體的な完全なる事實が哲學することの基礎に置かれなかつたと云ふことである」[1]と述べて居るが、これを積極的に云ひ換へるならば彼の哲學の根本思想は全體的な完全な歪められない經驗的事實を哲學することの根抵に置くと云ふことである。

卽ちこのことは彼の精神科學の哲學に一貫せる態度であつて、それは先づ消極的に精神科學の形而上學的基礎付 (die metaphysische Grundlegung der Geisteswissenschaften) の破壞となりて現はれて居る。卽ち今日まで形而上學が多くの場合精神科學の基礎となり來れるが故に精神科學の正しい基礎付を準備せんが爲には先づ此形而上學的基礎付を打破しなければならぬこととなるのである。彼はこれを諸精神科學基礎付の消極的部分 (der negative Teil der Grundlegung der einzelnen Geisteswissenchaften)[2] と呼び『精神科學序說』の第二編をこれに當てて居る。而して形而上學なるものは「實在の內面的普遍的聯關」を認識するものであると考へられてゐた限り諸科學を自己の下に從へたのであるが、形而上學が斯くの如き實在の聯關を認識し得ざることが明となりし今日に於ては最早や形而上學なるものは諸科學の基礎となり得ないのである。卽ちディルタ

1) VIII S. 175.
2) I. S. 125.

イに於ては總て概念なるものは事實より浮び上つた第二次的のものであるが故に、概念又は概念の體系立てられたものたる學に哲學的基礎の最後の支持點を求めることは許されないのである。

此點に於て彼は近代の生の哲學に內面的の結びを感じたのである。卽ち「生は生自體より解明さるべきである」と云ふ「偉大なる思想」はショペンハウエル以來常に體系的諸哲學に對抗しながら發展した。而して今やそれは新なる時代の哲學的興味の中心點をなすと彼は云ふて居る。[1] 自己の哲學の根本的思想の諸論文を集めたる全集第五卷並に第六卷に Einleitung in die Philosophie des Lebens 『生の哲學への入門』なる名題を自ら附したる[2] ディルタイは、彼が生の哲學の根本思想なりとするところのものをまた自らの哲學の根本思想として居るのである。卽ち彼は「生を生自體より理解せんと慾すること」を以て「私の哲學的思惟に於ける支配的なる衝動」であるとして居る。[3]

かくて既存の概念と體系よりはなれ生の事實自體に卽して精神科學の基礎を置かんとせし彼は精神諸科學を其對象たる人間的歷史的社會的生の本質に卽して確立せしめんとすることとなるのである。今このことを彼の語を以て「精神諸科學を歷史的社會的事實性の上へ基礎付けること」(Fundierung der Geisteswissenschaften auf die gesichtlich-gesellschaftlichen Tatsächlichkeit)[4] であると云ふことが出來るであらう。ディルタイは此要求を『精神科學序說』に於て次の如くに述べてゐ

1) V. S. 370-1
2) V. Vorberiebt des Herausgebers S. VII.
3) V. S. 4.
4) VII. S. 93.

る。即ち精神諸科學の聯關について「其等のものの地位は此生きた事實歴史的社會的實在の偉大なる事實 (die grosse Tatsache der gesichtlich-gesellschaftlichen wirklichkeit) 及びそれが記述的叙述への關係によつて規定されるのであつて一つの普遍的な科學への關係によつて規定されるのではない[1]」と述べて居る。また彼は「各の特殊諸科學は歴史的社會的實在よりその部分内容を取出す技巧によつてのみ成立する。此諸科學の組織、其分離に於ける各の健全なる成長はそれ故に各眞理の實在全體への關係の洞察に結ばれて居る[2]」と述べてゐる。更に彼は精神諸科學の自然諸科學よりの區劃をも亦此事實性に求めんとして、「諸精神科學の統一的全體の自然諸科學からの區劃がそれに基礎付けられて居る事實の總體[3]」として歴史的社會的實在の事實性を考察して居るのである。而して此『精神科學序說』に於て提出されてゐる要求は „Aufban"[4] に至つて歴史的社會的實在の事實性に基いて爲しとげられて居る。

然らば如何にして此歴史的社會的實在の本質的構造に迫まり得るであらうか。彼は此を歴史的社會的實在に對する認識者の關係の特別なる性質に於て見たのである。[5] 即ち彼の語を以てすれば「内より自分を體驗し而して知るところの我自身が社會體の成素であり……同時に此總てを直觀し研究するところの知性である」と云ふことである。また認識主體たる我は「それから社會、歴史が打立てられて居るところの要素」であつて、「我の内に於て内的知覺によつて其全内容に從

1) I. S. 39.
2) I. S. 28.
3) I. S. 4.
4) 全集第七卷 „Der Aufbau der Geschichtlichen Welt in der Geiteswissenschaften."
5) I. S. 35.

つて意識されて居るところのものと我の外にあつて此全體を打立てたところのものとは同じ出來事である。」と考へたのである。卽ち歷史的社會的實在を認識せんとする人間が此歷史的社會的實在の要素であり、此實在に於ける出來事は總て人間の生の表現である。而も人間は自分の中に於て直接に自己の生を知り得るのである。故に人間が自分の中に人間的生の本質的構造を知るならば、これに基いて人間は歷史的社會的實在の本質的構造を知り得るのである、と彼は考へたのである。而も彼は我に對して最も確實な事實は意識の事實であると考へたのである。かくて彼は意識の事實を以て彼の哲學の究極の基礎とするところの立場に立つこととなるのである。

此立場について彼は次の如くに述べて居る。[1] 先づ既に述べたるが如く、「特殊諸科學に結びと確定性を與へるところの諸命題の聯關に對する確乎たる支持點は何處にあるか」卽ち精神諸科學に根據付と聯關付を與へるところの精神科學の哲學的基礎の最後の支持點は何處にあるかを尋ねたる彼は、形而上學的立場自然科學的立場等を否定せし後、「專ら內的經驗に於て意識の事實に於て私は私の思惟に對する確乎たる依り所を見出した」として居るのである。卽ち「あるがままの事實性を我々は只內的經驗に於て與へられて居る意識の事實に於て有するのである。」而して此立場が究極的のものであることにつき次の如くに述べて居る。「我々の意識の諸條件の背後に溯ることの不可能は言はば目なくして見んと欲することの、又は認識の目を目自身の背後に向ける

1) I Vorrede S. XVII. ff.

ことの不可能を洞察して居る。此立場を私は認識論的立場と呼ぶ。近代の學問は此以外の立場を承認することは出來ないのである」。即ち意識の事實が我に於て與へられて居る究極的事實であつて我はこの事實の背後に更に溯ることは最早出來ないのである。かくて「生は哲學の出發點を形成しなければならぬところの基礎的事實 (Grundtatsache) である。それは內より知らるるところのものでありその背後に溯ることの出來ないところのものである」[1]。かくて完全なる經驗的事實を哲學することの根抵に置かんとするディルタイはこの意識の事實を彼の哲學の最後の基礎としたのである。

かくの如くに意識の事實を精神科學の哲學の最後の根抵に置かんとするディルタイは、當然に此事實を最も具體的に把握せんことに努めたのである。かくて彼は「意識の事實の聯關」に「哲學の全體的基礎」(das ganze Fundament der Philosophie) を認めることに於ては「ロックヒ、ユームカントの認識論學派」と一致を見たのであるが、然し此等の人々が哲學することの根抵に置いたところの人間は未だ具體的な人間ではなかつた[2]。即ち「ロック、ヒューム、カントの構成した認識主觀の血管の中には眞の血液ではなく、單なる思惟活動として理性の薄められた血が流れてゐる」。然るにディルタイは哲學することの根抵に眞實の具體的な人間を置かんとしたのである。即ち彼は曰く「全人の歷史並に心理的研究は私を導いて、其諸の力の多樣性に於て此全人を即ち此

1) VII S. 359
2) I. Vorrede. S. XVIII.

意志し感情し表象する存在 (dies wollend fühlend vorstellende Wesen)を、認識及び認識の諸概念(例へば外界時間本體原因)の基礎に置かしめた。」「我々の本質の全體性から出發する發展的說明のみが、總て我々が哲學に向ける諸の問題に答へ得るのである」と述べて居る。かくて彼は意志し感情し表象するところの我の具體的の意識の事實を究極的な立場とするものであつて外界の實在も此意識の事實より出でて初めて確立し居るのであるとするのである。卽ち彼は曰く「單に表象するものにとつては外界は只に現象だるに止まる。これに反して意志し感情し表象するところの我の全體的本質に於ては我自身と同時に而して同じ確實さで外的實在が與へられてゐる。……斯くて初めは我々自身の內的態度についてのみ敎へる樣に見えた經驗の領域は擴大される。我々の生命統一體と同時に外界は我々に與へられ諸の生命統一體は存在するのである。」またかかる意識の事實の具體性に於て彼は人間を、實在を認識しこれを價値批判し更に目的を定立し目的を實現せんとするところの實踐的構造として把握して居るのであつて、これを基礎として初めて實踐的なる彼の哲學が打立てられまた實踐學たる精神諸科學が確立されるのである。

彼は更に此人間的事實を其歷史的社會的本質に於て把握せんとし、此點に於て所謂個人主義的立場を批判して居る。卽ち此立場は「歷史並に社會に先立つ事實としての人間[1]」を假定し社會は此により、構成されるものであると考へるのであるが、かかる人間は眞實の人間ではない、而して

1) I. S. 31.

彼は曰く「我は我の狀態自身を體驗する、我は社會の相互作用の中へ、社會の諸種の體系中の交叉點として織り込まれて居る、我はそれ以上究明され得ない自己自身の深さに至るまで歴史的本質である」(Ich bin so bis nicht mehr erforschbare Tiefen meines selbst ein historisches Wesen)と述べてゐる、かくて我々は所謂個人主義又は心理主義に於て經驗するが如き無理なくしてディルタイの人間研究より歴史的社會的實在の段階へ順當に進むことが出來るのである。

ディルタイが哲學の根抵に置きたる人間はかくの如くそれ自身に於て智情意の具體性に於ける人間であり更に歴史的社會的實在の作用聯關の中に織り込まれて居る人間であるのみならず更にまたそれは自然の諸制約の下に立つて居る人間である。卽ちそれはそれ自身 Psycho-Physische Lebenseinheit「心的物的生命統一體」として身體的の制約の下に立つと共にまた諸種の自然的諸條件の制約の下に立つて居るのである。かくディルタイが彼の哲學の根抵たる人間を自然との具體的結びに於て把握せしことは經濟哲學にとつて特に有意義なることである。

ディルタイは、精神科學の哲學の最後の根柢としての人間をかくの如き具體的性に於て把握することを要求せしのみならず、更にまたその研究方法について、この事實を歪めざることを要求し、假定に立つて說明し構成する方法 (die erklärende und konstruktive Methode) を排斥して生の事實に於て與へられて居る聯關を記述し分析する方法 (die beschreibende und zergliernde

Methode) を取るべきことを主張した。[1] 彼の人間學なるものはかくの如き人間を對象としかくの如き方法を以て研究したるものである。而して彼は此人間學を最後の基礎として此精神科學の哲學の全體系を打立てんと晩年に至るまで努力したのである。私は以下彼の諸著作に亘り此精神科學の哲學の全體の構造を統一的に把握するに努め、以て其各論に入る全體的地盤を準備しよう。

四、其　構　造

人間學。先づこのディルタイの人間學に於ては、心的物的生命統一體としての人間が自然的並に社會的ミリューと實踐的に交渉するところの、卽ち先づ對象的實在を把握し、この實在認識に基きて價値評價をなし、更に此價値評價に基きて目的を定立し目的を實現するところの Struktu-rzusammenhang「構造聯關」が明にされた。これディルタイ哲學全體の中心的基礎概念を成すところのものである。次で此構造聯關に基いて Entwicklungszusammenhang「發展的聯關」が明にされ、更にかくして明にされし普遍性を基礎として個性化の原理が明にされて居るのである。[1]

歷史的社會的實在構造論。彼の精神科學の哲學の基礎には其最後の基礎としての人間學の上に置かれてあるところの歷史的社會的實在の構造論がある。『精神哲學序說』の中に於て彼が歷史的社會的實在の事實性の上に精神科學を基礎付けんとする要求を示めせることは、既に述べたると

1) V. S.

ころであるが、彼の最圓然期の作たる『Aufbau』に於てはこれが爲されて居る。而して茲に彼の哲學とヘーゲル哲學との結が感ぜられるのである。かくて我々はディルタイの精神科學の哲學は、カント的課題より發してヘーゲル的基礎に至つて居ると云ふことが出來るのであろう。卽ち此哲學の基礎を爲す人間學と此に基く歷史的社會的生の構造論とはヘーゲルの『精神の哲學』に相當する。而も彼は「ヘーゲルは形而上學的に構成し我々は所與的なるものを分析する」と云へるが如く其方法を異にして居るのである。

卽ちディルタイは人間學に於て明にされたる人間の本質的構造と其概念を以て歷史的社會的實在の本質的構造を分析して居るのである。第七卷第二部に於ける Die Geistige Welt als Wirkungszusammenhang『作用聯關としての精神界』[1]の論が是であつて、それは「歷史的並に社會的世界であるところの精神界を ihrem Wesen nach 其本質に從つて詳細に規定すること」を課題として居るのである。而して先づ彼は『精神界の作用聯關の一般的特性』[2]を明にした。卽ち歷史的社會的實在の特性を自然の因果聯關 Kausalzusammenhang der Natur より區別し人間の作用聯關として把握し、其最も一般的なる構造を「精神的作用聯關の內在的目的的性」として卽ち「人間の心的生命の構造聯關に從つて」其作用聯關の中に於て實在認識に基き價値を生產し目的を實在することであるとして把握した。かく歷史的社會的實在が人間と共に其實踐的本質に於て把握されて居

1) V. S. 139. ff.
1) VII S. 152.
2) Ebende. S. 153.

ることは、實踐學としての經濟學の哲學的基礎として重要な意義を有するのである。[1] 更に進んで「分析的仕方により」諸の歷史的社會的實在の中に於ける「諸の作用聯關を分離」することによつて其各の本質的構造を明にして居る。先づ最も單純なる作用聯關であるところの文化體系 Kulturs ystem 一般の構造を分析して居る。ディルタイは經濟生活 Wirtschaftsleben を以て法律、藝術、哲學、科學宗教、教育等と等しく文化體系であるとするが故に、經濟生活の文化體系としての本質は茲に明とされ得るのである。次に外的體制 Aussere Organisation 殊に諸文化體系が國家權力の下に置かれて居るところの『政治的に組織されて居る國民』なるものの構造を分析して居る。經濟生活も具體的にはかかる構造の中に於てあるのである。最後に此等諸國民をその中に含むところの世界歷史の聯關としての Zeitalter und Epochen『時代及時期』の問題に進み、「其構造聯關を分析的に規定し」て居る。

以下述べんとする精神科學の哲學の諸問題は斯くして明にされたる人間の及び歷史的社會的實在の本質的構造を基礎として明にせられて居るのである。かくて彼は「歷史的社會を全體として、此全體を作用聯關哲として、此作用聯關を價値附與、目的定立、約言すれば創造するものとして、然る後此全體の此自身よりの理解、最後に價値及び目的を時代及時期へ卽ち全般史へ中心すること、—これがその下に於て精神諸科學の求めらるる聯關が考察されねばならぬ觀點である」[2]

1) 拙著「精神科學的經濟學の基礎問題」第一三五頁以下參照.
2) VII. S. 155

と述べて居る。

精神科學の區劃。ディルタイは、精神科學の自然科學よりの區劃限界をも、結局に於て以上の實在論的基礎の上に基けたのである。卽ち人間的歷史的社會的實在に於ては、其最も一般的本質たる實踐性又は創造性に基いて、「官覺に近き得ない只だ體驗し得らるるのみ」の生 Leben が官覺界に表現 Ausdruck せられ、而して此外的なる表現より內的なる生が理解 Verstehen せられるのである。ディルタイは此點に基いて精神科學の本質を規定し「それの對象が生と表現と理解との聯關 Zusammenhang von Leben, Ausdruck und Verstehen に基ける態度によつて、我々に近く時にのみ、一つの科學は精神科學に屬する」[1] と述べて居る。經濟學も亦たかくの如き本質に於て精神科學に屬するところのものなのである。

この「生」と「表現」と「理解」との聯關はディルタイの精神科學の學問論の中心概念を爲すものであることは、以下述べんするところの精神科學の論理學及認識論に於て明にされるであろう。

既に述べたるが如く、ディルタイの精神科學基礎付の課題は三つに分たるるのであるが、茲には先づ其第一のもの、卽ち對象把握又は存在認識の理論的並に認識論的の問題について述べよう彼はこれを全集第七卷に於て取扱つて居る。

彼は對象把握の課題を次の如くに展開して居る。[2] 卽ちここに三つの課題が解かれねばならない

1) VII. S. 87.
2) VII. S. 24.ff.

第一の課題は精神科學に於て歷史的社會的實在の實在認識が成立つ「一般的な論理的構造」を明にすることであり、第二の課題は此一般的な論理的聯關が個々の域を通じて實現せられて行くところの諸業績 Leistungen を全體の聯關より分離して其各を明にすることであり、ここに諸の精神科學の方法論 die Methodenlehre der Geisteswissenschaften が明にされることとなる。第三の課題は認識價値の問題であつて、卽ち「最後に此精神諸科學の此等諸業績の認識價値が何であるか、而して如何なる範圍に於て此諸業績の協働により客觀的なる精神科學的價値が可能となるかが問題となる」。然るにこの後の二つの問題の間には密接なる內的聯關が成立つ。「これ諸業績の分離は其認識價値の吟味を可能ならしむる」からである。斯くて第一の問題は第七卷の第二部に於て取扱はれ而して第二と第三の問題は相結ばつて『歷史的理性の批判』(Kritik der historischen Vernunft) として第三部に於て取扱はれたのである。卽ち前者は論理學的部分であり、後者は認識論的部分であると云ふことが出來るであらう。今此論理的部分より始めて考察しよう。

論理的基礎。彼は既に第七卷第一部に於て對象把握又は實在認識の心理的構造を明にして居るのであるが[1]、茲にはこれに基いて其論理的構造を明にして居る。而して先づ „Das Gegenständliche Auffassen" 『對象把握』[2]に於て『對象把握一般の構造論』を取扱ひ、次に人間的社會的實在の本質的構造に卽して精神科學に於ける對象把握の構造を明にした。而して『生と精神科學』[3]に於ては、

1) VII. S. 24. ff.
2) Ebenda. S. 121.
3) VII. S. 130

生より精神科學の成立する構造を明にして居る。これに基いて我々は經濟的生より經濟學の成立する構造をも明にし得る。次に『それに於て精神界が與へられる態度の仕方』[2]に於ては理論的研究と歴史的研究との絶へざる相互聯關により實在認識がとげらるる構造を明にした。これに基いて我々は經濟學に於ける理論經濟學と經濟史との關係をも明にし得るのである。次に『精神の客觀化』[3]に於ては精神科學に於て取扱はるる表現の一般的性質が明にされて居る。以上に於て精神諸科學が如何にして生より成立ち、如何なる仕方により、如何なる表現を取扱ひ以て實在認識を成立たしむるかの論理的構造一般が明にされたのである。かくて此論は實在認識成立の觀點より「生」と「理解」と「表現」とを考察したものであると云ふことが出來る。

認識論。茲に於ては以上明にされし人間學、歴史的社會的實在論並に理論的基礎に基いて人間的歴史的社會的實在の各の域に於て「生」と「表現」と「理解」との本質が明にされ以て實在認識の認識價値が考察される、從つて最も具體的なる論が見られるのである。此部は更に二部に分たれ、前段に於ては個人としての人間につき「生の諸範疇」が展開され、生の「表現」の性質が明にされ生の「理解」の性質が詳論されて居る。此を基礎として後段に於て歴史的社會的實在に於ける諸の域につき其「生」と「表現」と「理解」とが考察される。卽ち歴史的社會的實在の本質的構造に基いて順次に諸文化體系、國民、世界史につき此問題が考察されて居る。而して文化體系の論に於ては

2) Ebenda. S. 138
3) Ebenda. S. 146

先づ諸文化體系に關する全般論がなされ、次に諸文化體系の各論に進んで居るのであるが、其第一に於いては Das Wirtschaftliche Leben『經濟的生活』なる項目が掲げられて居る。[1] 卽ち茲に經濟的文化體系についての論が爲さるべき筈であつたのであるが、彼は遂に此事を果し得なかつたのである。然しながら彼の精神科學の哲學全體の構造と此論の前後の聯關より其內容となるべかりしものを推察することは出來るであらう。卽ちそこには先づ人間學的立場に立つて、經濟的文化域をその表現とするところの生の構造が、其環境と實踐的態度的に交涉する心的物的生命統一體としての人間に於て明にされ、此に基いて經濟價値なるものが明にされねばならぬであらう。次に歷史的社會的實在論の立場に立つて、此生の表現としての經濟的文化體系なるものの本質的構造が明にされねばならぬであらう。かく經濟的實在の本質が明にされし後此實在を理解する方法論並に其認識價値の問題が明にされねばならぬであらう。然し經濟生活の哲學的考察は經濟的文化體系の論に終ることは出來ない。而してディルタイの諸文化體系の全般論の計畫より見るも、他種文化體系との聯關に於ける其構造及び認識の問題が茲に明にされ得るであらう。更に文化體系の論の次に來る『國民』の論に於ても國民社會に於ける經濟的生活の構造並に認識の問題が明にされ得るであらう。また『人類及世界史』の論に於ては、ディルタイは Revolution 革命なるものの本質的構造を明にして居るのであるが、ここに於ても革命の本質構造に於ける經濟的生

1) VII. S. 265

活の地位も明にされ得るであらう。かく考へ來る時我々はここに經濟哲學の多くの問題を見るのである。而してこれ等の論は以上述べ來りしディルタイの精神科學の哲學的考察全體を前提として初めて確立し得ることは明であらう。かくて我々は經濟哲學なるものがかくの如き精神科學の哲學をはなれてあり得ないことを明にし得るのである。而して寧ろ經濟哲學なるものはかくの如き精神科學の哲學に於て經濟生活を中心としたものであると云ふことが出來るのであらう。

以上に於ては存在の知識卽ち歷史的認識の知識と理論的認識の知識との論理的並に認識論的基礎が置かれたのである。而してディルタイ「の精神科學の基礎付」は單に實在の知識の問題のみならずして更に價値並に目的の知識卽ち實踐的知識の問題を課題として居るのであり且ディルタイはこのことの必要なることを特に注意して居るのである。かくて次に價値の知識並に目的の知識が論理的並に認識論的に基礎付けられねばならぬのである。而して生の構造聯關に於て實在認識の上に價値評價、目的定立が立てられて居るが如く、以上の存在の知識の理論の上に價値並に目的の知識の理論は打立て得るのである。

ディルタイは實在の知識に關しては其論理的並に認識論的基礎を以上述べ來りしが如く統一的に而も詳細に展開したのであるが價値の知識及び目的の知識に就てはかくの如く纏まれる論を展開して居ないのである。而も我々は、既に存在の知識の理論に於て此知識の理論の立つべき直接

の基礎を與へられまた知識の理論の一般的構造を示めされて居るのみならず、更に價値並に目的の知識の理論の骨子となるべきところのものをディルタイに於て與へられて居ることを見るのである。

先づ此等の知識の理論も存在の知識の理論に於けると同樣に其最後の基礎たる實在論的基礎として人間學と歷史的社會的實在の本質論とを要するのであるが、既に述べしが如く、ディルタイは其人間學に於て人間を單に理性的のものとしてではなく感情し、意思し、表象するところの實踐的本質に於て把握し、また其歷史的社會的實在の本質論に於ては此實在を同樣なる實踐的本質に於て把握して居るのである。かくてディルタイの實在論は其上に當然に價値並に目的の實踐的知識が基礎付けらるべく置かれてあるのである。

次に其論理學的考察に就て見よう。既に述べたるが如く、ディルタイは對象把握の論理的構造を第七卷第一部に於て豫め明にされて居たる對象把握の心理的構造を基礎としこれより明にしたのであるが、同じく第七卷第一部に於ては既に價値の知識を成立たしむるところの心理的構造が感情すること (das Fühlen) の構造[1]に於て、又目的並に規範の知識を成立せしむるところの心理的構造が意思すること (das Wollen) の構造[2]に於て述べられて居るのである。故に我々は此に基いて此等の知識の成立する理論的構造を明にし得るのである。

1) VII. S. 46. ff.
2) Ebena. S. 61. ff.

次に價値の知識、目的並に規範の知識の認識論の骨子をもディルタイは示めして居るのである即ち彼は第六卷の初め殊に『普遍妥當的教育學の可能に就て』なる論文に於て、人間を對象とする實踐學であるところの教育學の內容をなす價値、目的、規範の知識に就て其妥當性の根據と限界とを人間の心的構造を基礎として明にし、且「茲に教育學に就て示めされたることは、生を指導すべき他の精神諸科學に對しても同樣に妥當する」と述べて居る。而して此生を指導すべき他の精神科學とは經濟政策等歷史的社會的實在の實踐學を意味するのである。

かくて我々はディルタイによつて與へられたる此等の骨子と彼によつて示めされたる知識の理論の一般的構造によつてディルタイの人間學及び歷史的社會的實在論の上に價値、目的並に規範の知識の論理學並に認識論を打立て以てディルタイの精神科學の哲學の三課題を充すことが出來るのである。

以上に於て精神科學の哲學的基礎が置かれたのであつてこれディルタイが『精神科學の基礎付』Grundlegung der Geisteswissenchaften と呼ぶところのものである。而して既に述べしが如くこの哲學的基礎に基いて精神諸科學が根據づけ聯關づけるならば、これが精神科學のエンチクロペディであり『精神科學の哲學の第二部』をなすのである。

即ち歷史的社會的實在の具體的全聯關は最も普遍的な問題として我々に迫まるところのもので

ある。[1] 而して嘗ては形而上學が經驗諸科學をはなれてかかる要求を充すものであると考へられたのであるが今やこのことは許されない。かくて此要求は、結局に於て以上の哲學的基礎に基ける精神諸科學の聯關付によつて充されるのである。

かくて精神諸科學の聯關付によつて實在の全聯關に迫まり得るならば、ここに我々は精神諸科學と其哲學的基礎との間に相互聯關を見るのである。これ此哲學的基礎の土臺には既に明にせし如く歷史的社會的實在の構造聯關が置かれてあるのであるが、此哲學的基礎の上に聯關付けられた精神諸科學はまた此實在の構造聯關の解明に寄與するが故である。

互に歷史的社會的實在の一部をその認識對象とする精神諸科學は相寄つて其全實在の聯關を認識せんとするのみならず、また相寄つて實在を支配せんとするのである。而して精神的實在の實踐性をその最後の基礎とするディルタイの精神科學の哲學はその各々が實踐學的構造を有するところの諸の精神諸科學を根據付け聯關付けることによつてまた此實在の支配を完成せんとするのである。ここにディルタイが哲學の究極的目的とするところの實踐的要求が充されるのである。

既に明にせしが如く、[2] 經濟哲學なるものは、經濟的實在の本質を明にし、此實在の認識の本質を明にし、此實在を支配する內的の力とならねばならぬのであるが、我々は以上ディルタイの精神科學の哲學に於て、此經濟哲學の土臺を見たのである。かくて私は稿を改めて此土臺の上に經濟哲學の諸問題を考察せんとするのである。（完）

1) I. S. 95.
2) 前卷第四號